

崖の上で踊る

石持浅海

第六回

第三章 朝寝坊（承前）

食堂を沈黙が支配していた。

——僕たちの復讐計画を邪魔する最も確実な方法は、僕たち全員を殺すことだ。

あめもり 雨森の言葉は、復讐者たちを凍りつかせた。誰も言葉を返すことができずに、ただ静止している。

とはいえ、一橋いちひしが体現したような、完全な静止ではない。生者たちは、むしろ動揺を隠しきれずに上体を揺らしていた。絵麻えまは、その事実にもしろ安心する。

仲間を黙らせた張本人、雨森もまた黙っていた。その顔には、何の表情も浮かんでいない。仲間が死んだ悲しみも、犯人に対する怒りも、みんなを驚かせた会心の表情も、何もない。ただ黙って、仲間たちを見つめていた。

「全員を殺す」

長い間を置いて、千里ちさとが口を開いた。「ずいぶんと極端な話ね」

「うん、そう思う」

雨森はあっさり肯定した。千里が瞬きする。「だったら、どうして

――」

「二人殺されたからだ」

雨森はそう答えた。

「殺されたのが吉崎よしざきさん一人だったり、菊野きくのさん一人だったのなら、こんなことは考えない。一橋さん殺しと同一犯かどうかはわからないけれど、犯人の意図いとはまるで見えないままだ。けれど、昨晚殺されたのは、二人だった」

雨森の声は決して大きくはないけれど、確実に絵麻の理性に響いた。考えろ、とその声は訴えている。

「ひと晩のうちに二人殺されたという事実が、犯人が死体を量産したがっていることを想像させるんだ。自分たちが置かれた環境で、仲間が次々と殺されている。犯人が皆殺しを狙っていると考えても、

無茶じゃないだろう」

「無茶じゃないね」瞳ひとみが認めた。その口調も表情も、今までとは違っている。変わらないように見えて、どこか虚ろうつろだった。息子のように思っていた菊野が死んでしまつて、精神にダメージを負っているのは明らかだ。亜麻音あまねは衝撃で失神した。瞳は意識ははつきりしているし、思考能力も保たれている。しかし何か大切な部分を、ごっそり持っていかれた。そんなふうに見えた。

「犯人が皆殺ししたがっているのなら、その目的は復讐計画の妨害と考えるのも、そのとおりだと思う。やっぱり犯人は、裏切り者なの?？」

雨森あいまいが曖昧しゆごうに首肯した。

「僕たちは復讐のために集まっている。それなのに復讐をやめたがつてるのなら、裏切り者と認定していいと思う」

「えらく回りくどい言い方じゃないの」

沙月みげんが眉間にしわを作った。「それ以外にないと思うんだけど」

「わからないからだよ」雨森は即答した。「僕は全員殺害って言ったけど、それだって自信を持っているわけじゃない。今説明したように、そんなふう想像したってただけだ。でも、今考えるべきは、犯人の狙いじゃない」

「つていうと?？」

雨森は今度はすぐに答えず、ゆっくりと仲間たちを見回した。

「一橋さんのときと、同じ問題提起をさせてもらう。一橋さんに続いて、吉崎さんと菊野さんが殺された。十人の仲間が、七人になってしまった。それでも復讐計画を継続するのかどうか。どうする？」

もちろん継続と答えかけて、思い留まる。雨森は同じ問題提起といったけれど、実は違うのではないか。思いつきを口に出してみることにした。

「雨森さんは、こう言いたいんだね。もし犯人が復讐を妨害するためにメンバーを殺してるのなら、犯人はまだまだ殺す可能性が高い。雨森さんが心配しているように、全員を殺すかもしれない。でも復讐を思い留まれば、殺されないんじゃないかと」

雨森が少しだけ嬉しそうな顔になった。理解者が現れたときの表情だ。「そのとおり」

食堂の空気が揺らいだ。無音のざわめき。お互いがそっとお互いを見る。その表情は、一様に強張^{こわば}っていた。

それもそうだろう。一橋の時は違った。吉崎の巧みな誘導のおかげで、メンバーの中で一橋だけは違う存在と認定できた。だから一橋の死と自分自身を切り離すことができた。

吉崎と菊野は違う。百歩譲って、吉崎はフウジンブレードへの恨

みがないから、自分とは違うグループだと言い張れるかもしれない。しかし菊野はフウジンブレードに強い憎しみを抱いている、正真正銘の復讐者だ。つまり、自分と同じ。菊野が殺害された時点で、殺人事件は自分の問題になったのだ。

——殺されるかもしれないけど、殺す？

雨森が言っているのは、要はそういうことだ。今までの自分たちは、殺す側だった。しかし殺される側に立ったときに、決心をぶらさずにいられるのか。雨森はそう問うているのだ。

答える者がいない中、質問者が片手を挙げた。

「訊くばかりじゃ卑怯ひきようだな。まず、僕から意思表示をしよう。僕は、復讐を捨てるつもりはない。犯人が誰で、何を考えて仲間たちを殺しているのか知らないけど、僕は中道なかみちと西山にしやまを殺すつもりだ」

一切の迷いが無い口調。まるで、犯人に対して宣言しているかのような。

絵麻は、雨森の事情を思い出した。

雨森もまた、絵麻えまや沙月さつき、江角えすみの息子と同様、設置したフウジンWP1によって偏頭痛へんずつうを引き起こした。絵麻たちと違ったのは、同棲せいしていた恋人と二人一緒に発症せいしたことだ。

二人だったことが、かえって災いした。他に相談することなく、二人だけで解決しようとした。しかしできるわけもなく、症状は悪

化していった。そして、恋人を悲劇が襲った。通勤電車が入ってくるとき、急に偏頭痛がひどくなった。よろめき、ホームを走っていた通勤客とぶつかった。相手が立ち止まっているか歩いているかだったら、その場にうずくまっていたかもしれない。しかし相手が走っていたため、はじき飛ばされる恰好で反動でホームから落ちた。そしてその上を、電車が通り過ぎたのだ。

即死。

恋人の両親は、ぶつかった通勤客に対して損害賠償請求の訴訟を起こしていると聞く。通勤客が突き飛ばしたことが、娘の死の原因だと。しかし雨森は裁判自体に興味はなかった。関われなかったともいえる。雨森は恋人と同棲する際に、相手の両親に挨拶あいさつに行っている。結婚が前提だったからだ。両親も快諾していた。しかし籍を入れていなかった以上、両親にとって雨森は他人だ。娘を護まもってくれなかったという恨みもある。両親は雨森の存在を「なかったこと」にした。

アパートにフウジンWP1を設置したのは、雨森の提案だった。恋人の死は、自分が原因を作った。そう自らを責めたうえに、両親の両親からその存在を否定された。自分自身もまた、被害を受けている。フウジンWP1を製造したフウジンブレードに憎悪を向けるのは、当然の成り行きだった。

雨森はいつも穏やかだった。復讐のための作戦を立案する際にも、決して激することなく、最善の策を提案し続けた。

あれほどの憎しみを抱いていながら、どうして怒りを噴出ししないのか。たとえば、江角のように。絵麻も最初は理解できなかった。しかし彼と一緒に過ごすうちに、わかったことがあった。憎悪というものは、一定限度を超えると、かえって表に出なくなるものなのだ。

そんな雨森の体験を考えると、復讐継続の意思表示は当然のことに見える。憎しみが二乗——二倍ではない——になっている以上、殺されるリスクなど、どれほどのものでもない。そう考えているのだろう。

他のメンバーはどうなのだろう。沙月は家庭を壊されている。江角は息子を、千里は弟をフウジンブレードのために失っている。瞳は夫を壊された。そして絵麻は、自分自身が壊れかけた。みんな、フウジンブレードに強い憎しみを抱くには、十分な被害を受けている。事実、こうして復讐計画に参加し、実際にふえき笛木を殺害した。覚悟なら、並々ならぬものを持っている。

しかしその復讐心は、自らの命と引き替えにできるものなのか。雨森は、できると言い切った。では、自分はどうか。

「わたしも、続ける」

口に出した。全員の視線が絵麻に集まる。

「自分も狙われるという要素は加わったけど、状況は本質的には変わってないと思う。わたしたちは、もう笛木を殺している。ここで中断したら、中道と西山を殺すチャンスは、永遠になくなる。わたしは、復讐を捨てられない」

「俺もだ」今まで黙っていた江角が続いた。「狙われたくらいでびびってたら、息子に笑われる」

「わたしも、継続に賛成」瞳がテーブルに肘を突いたまま右手を挙げた。「ここであきらめたら、菊野くんが草葉の陰で泣くね」

「わたしも、同じことを言わせてもらおうか」千里が意思の力で笑顔を作った。「復讐をやめたりしたら、一橋さんの意志をムダにすることになる」

「やれやれだね」沙月がわざとらしくため息をついた。「マンガや映画じゃないんだから。我が身が減びても復讐を遂行するなんて」

両手を上に上げて、伸びをする。

「わたしも続けることに一票入れるよ。死んでしまった人のためじゃなくて、わたし自身のためにね。絵麻さんと一緒。中道や西山がこれからも大手を振って生きていくなんで、耐えられないから」

ふうっ、と雨森が息をついた。

「この場にいる全員が、復讐継続に賛成なんだね。じゃあ、後は皿

麻音さんだけだ」

天井を見る。自室で眠る亜麻音に意識を向けたのだろう。

「今、起こすのは気の毒だ。意思確認は、目覚めた後でいいだろう」

「あの子は、別に確認しなくてもいいんじゃない？」

沙月が口を挟んだ。唇に、あるかなしかの笑みが浮かんでいる。

「目が覚めても、使い物になるとは思えない。なんといっても、失神するくらいショックを受けてるんだから」

「そうね」瞳も同調した。「亜麻音さんは、吉崎さんに心酔してたからね。吉崎さんがいなくなった以上、やる気もゼロなんじゃないかな」

「だから困るってこともある」

雨森が実際に困った顔になった。「やる気がゼロになったり、協力してくれなくなるだけなら、まだいいんだ。自棄^{やけ}になって、予想外の行動に出られると、厄介だ」

「予想外の行動って」絵麻は想像力を働かせる。「警察に駆け込むとか？」

雨森が苦笑した。「想像できないから、予想外っていうんだ」

「それもそうか」

雨森が表情を戻す。「ただ、警察はないと思う。亜麻音さんが今ま

で、どの程度吉崎さんと行動を共にしたのかは知らない。でも吉崎さんの口ぶりから類推すると、かなりの人数を手にかけている。亜麻音さんがそれらの従犯だったら、刑は相当重くなるだろう。警察に行くことは、自らの破滅を意味するんだ。いくら吉崎さんを殺した犯人が憎くても、警察の手を借りるとは思えない」

「その辺りの計算ができないからこそその、自棄なんじゃないの」
瞳が指摘して、今度は雨森が「それもそうか」と言った。

沙月が腕組みする。「じゃあ、亜麻音さんを監視した方がいいのかな」

「そうかもね。監禁する必要はないと思うけど」
割り切った瞳の発言だった。

絵麻は違和感を覚える。昨晚の、一橋を敵と決めつけた発言と、同種の違和感。

瞳が指摘したように、亜麻音は吉崎に心酔していた。彼の庇護ひごの下で発揮した行動力には、大いに助けられた。視野の狭さやとげとげしい発言は気になったけれど、大切な仲間であったことは間違いない。

それなのに、吉崎の死をきっかけに、仲間たちは亜麻音を用済み扱いしはじめた。正しいのかもしれない。復讐を完遂するためには、その程度のドライさは必要なのかもしれない。仲間たちには、そう

振る舞う覚悟ができているということなのだろうか。

あるいは、麻痺まひしているのか。標的の一人、笛木を殺害した時点で、精神のどこか、正しい反応をするべき回路が麻痺しているようにも思える。だから一橋が死んだときにも、吉崎や菊野が死んだときにも、最初は驚いたけれど、すぐに理性を取り戻した。絵麻自身も含めてだ。麻痺しているからこそ、仲間をも道具扱いできる。そういうことなのかもしれない。

それでも仲間たちの亜麻音に対する態度には、絵麻は違和感を覚えてしまう。みんな、どうしても吉崎を失った亜麻音の心情に思いを馳はせないのか。同情しなくていい。ただ、気遣ってあげればいいのに。亜麻音を気遣ったのは、意思確認を今すぐ求めなかった、雨森だけではないか。

その雨森が口を開いた。

「まあ、亜麻音さんのことは、本人が起きてからでいいよ。僕たちは、復讐の継続を決めた。だったら、どうする？」

返事はなかった。雨森の真意が計りかねたからだ。絵麻にもわからなかった。だから訊いてみることにした。

「どうして？」

雨森は「察しが悪いな」という顔はしなかった。元々説明するつもりだったのかもしれない。

「これも、一橋さんのときに出てきた問題だ。吉崎さんと菊野さんを殺した人間は、この中にいる。しかも僕たちの復讐を妨害しようとしている可能性が高い。明日の朝の作戦実行時に、素直に協力してくれるのかな」

決して高圧的な口調ではなかった。それでも彼の言葉は、砲丸のように絵麻の胸を直撃した。生唾なまつばを飲み込もうとして失敗し、底にわずかに残っていたコーヒーを飲んだ。

「……犯人を排除した方がいいってこと？」

「犯人の狙いが、本当に復讐の妨害ならね」

雨森が言葉を切ると、また食堂を沈黙が支配した。今度は、誰も目を合わせようとしなない。

犯人はこの中にいる。

つまり、この中の誰かが、自分を殺したがつているということだ。フウジンブレードへの復讐を止めるために。それを阻止するためには、自分たちが犯人を殺さなければならないというのか。

自分たちはもう、笛木を殺害している。だから殺人に抵抗はないはずだ。でも相手が仲間だと考えれば、決心も鈍ってしまう。いくら相手が裏切り者だとはいえ。ちらりと雨森を見る。彼は、そこまで考えた上で、復讐を継続するかどうか、問いかけたのだろう。

瞳がため息で沈黙を破った。

「殺すか、殺されるかってことね」

瞳の言うとおりだ。自分たちが望まなくても、犯人が望むのなら、そうならざるを得ない。

雨森は、テーブルを囲む全員を、等分に見た。

「裏切り者を殺すのはいい。ずっと言っているように、僕はフウジンブレードへの復讐を最優先させる。それを止めようとする奴は、力尽つくで阻止するつもりだ。でも、それが誰かわからないうちは、阻止しようがない。誰かわからないからみんな殺してしまえでは、犯人と変わらない」

雨森は、ゆっくりと一言ずつ、はっきりと言った。

「誰が、やったんだろうね」

空気が震えた。

「おっ、俺じゃないぞっ！」

江角が叫んだ。しかしその大声は、女性陣にほんの少しの感銘かんめいも与えなかった。

「わたしでもないよ」

まず瞳が答え、千里、沙月が続いた。もちろん、絵麻も。

「そうだね。僕でもない」

雨森がとどめを刺し、話を進めた。

「一橋さんのとき、吉崎さんが犯人の特定を主張して、僕が疑問を

投げかけた。本当に必要なのかと。今回も同じように必要性を考えただけど、必要という結論が出てしまった。復讐のために。僕たち自身の身を護るために。手順を踏んで、全員が納得いく形で犯人を特定する必要がある」

「全員が納得か」千里が繰り返す。「一人に疑いがかかったとき、集団心理で一気に決めつけないよう、気をつけないとね」

「全員つてのは、犯人本人も含まれるよね」沙月が補足した。「警察がないから、現場検証しても意味がない。一橋さんに至っては、死体まで動かしてる。動かぬ証拠を突きつけて犯人を屈服させるのは、相当難しい気がする」

「現場検証か」瞳が自らの顎をつまんだ。「吉崎さんの部屋にも、菊野さんの部屋にも、全員が入ったからね。遺留品いりゆうひんがあったところで、あのとくに落としたと言ひ張れば、通つちやう」

沙月や瞳の言うとおりだ。自分たちは、警察のように証拠集めができない。証言を取ったところで、裏を取ることもできない。素人集団が犯人特定を試みても、うまくいく自信がない。

しかし、それでもやらなければならないのだ。雨森が指摘したように、復讐と自分の命がかかっているから。

「一応、確認しておこうか。昨夜、解散してから、みんなは何をしてた？」

あらかじめこう言おうと決めておいたような、雨森の科白せりふだった。
「まず、僕から。みんなが部屋に戻った後も、食堂で少し考え事をしていた。そうだな、数分間くらい」

「考え事って？」

瞳の質問に、雨森は簡単にうなずいた。

「一橋さんの死体を発見してから解散までに話したこと。本当に正しかったのかって。可能性だけをいえば、どんな理屈もつけられるけど、吉崎さんが持ち出した、一橋さんも敵と認識して殺害したっていう仮説が、最も説得力があった。それ以上納得できる反論が思いつかなかった」

絵麻は昨晚のことを思い出した。自分は、席で一人考え込んでいる雨森に「お疲れさま」と声をかけて、沙月の部屋に行ったのだ。

彼の証言どおりだった。

「だから考えることをやめて、部屋に戻った。缶ビールを二本と、さきいかの袋をもらっていった。シャワーを浴びて、ビールを飲みながらテレビのニュースを観てから寝た。十二時くらいだったと思う。部屋に戻ってから朝起きるまでの間、部屋を一步も出なかった」

雨森は長くしたテーブルの短い辺に座っている。左右は絵麻と沙月だ。向かい合う形の二人がお互い譲り合って、絵麻が話すことに

なった。

「わたしと沙月さんは、二人でワインを飲んでた。沙月さんの部屋で。結局二人でボトル一本空けたんだけど、沙月さんがうとうと始めたからベッドに寝かせて、自分の部屋に戻ったんだ。それから化粧を落としてシャワーを浴びて、すぐにベッドに入ったよ。寝た時間は、憶えてない」

「結局一本飲んじやったと思ったところまでは、憶えてる」

沙月が言い添えた。「そっか、絵麻さんが寝かせてくれたのか」

「放置しただけだね」

「ともかく、目が覚めたのは、朝になってから。シャワーを浴びて食堂に下りるまで、部屋を出なかったよ」

「わたしも、ずっと部屋にいた」瞳が短く言った。「さすがにぐったりしてたから、化粧だけ落として、すぐにベッドに入った。朝起きるからシャワーを浴びて下に下りたら、千里さんがコーヒを飲んでた」

「そう。朝はわたしが一番乗りだった」千里も言った。「それまでは、一度も部屋を出なかった。というか、出たくなかった。一人になりたかったんだ。仲間が殺されたっていう事実を、どう受け止めればいいのか。このまま復讐を続けるべきなのか。一人で考えたかった」

「それで、結論は出たの？」 検察官のような沙月の口調。千里は薄く笑った。

「素直に受け止めることはできないけど、復讐しないって選択肢はないことはわかった。それは、さつき話したとおり」

「俺も、一人でいたよ」 やや落ち着きを取り戻した江角が言った。

「一橋さんが死ぬなんて、想像の範囲外だったからな。さすがにぐったりして、とにかくタバコを吸いたかった。ビールを飲みながら吸ってたら、いつのまにか寝てしまった」

瞳が^{じゆうめん}渋面を作った。「いやだ、寝タバコ？」

「そう」 江角は悪びれずに答える。「目が覚めたら、シーツが少し焦げてた。やばかった」

「よしてよ。一緒に焼け死ぬのはごめんだよ」

強い非難に、江角はしゅんとしてしまった。

「まあ、大丈夫だろう」 雨森が割って入った。「最近のシーツは難燃性だろうから。ともかく、ここにいる全員が、部屋に戻ってからは出ていないと証言した。もちろん、全員が犯行を否定している。それらを全て信じるのなら、亜麻音さんが犯人ということになる」

一瞬の沈黙。しかし長くは続かなかった。江角が独り言のようにつぶやいたからだ。

「ひょっとして……」

雨森が江角の方を向いた。「どうしたの？」

寝タバコを非難されてしよげていた江角が顔を上げた。

「ちよつと聞いてくれないか」

言われなくても聞く態勢は整っている。江角は唾を飲み込んだ。

「亜麻音さんなんだ」

「亜麻音さん？」

「そう。昨日の午後、笛木を殺した後、部屋で休憩したときのことだ。ほら、俺の部屋は吉崎さんの隣だろう？ 部屋でごろごろしてたら、隣の部屋から声が聞こえたんだ。ここは壁がそんなに厚くないから、声が大きければ、隣に聞こえる」

「吉崎さんの部屋から、亜麻音さんの声が聞こえたってことだね」

千里が回りくどい説明を整理した。しかし江角は単純に首肯しなかった。

「そうだ。でも、単なる声じゃない。あのとときの声だ」

あのととき。江角ははつきり言わなかったけれど、想像はつく。

「乳繰り合うちちくときの声ね」

今度は腫が身も蓋ふたもなく言い換えた。江角の顔が歪んだ。笑顔を作ろうとして失敗したみたいに。

「考えてもみろよ。笛木を殺した直後だぜ。そりゃあ、俺だって笛木が死んだ瞬間は嬉しかった。ぞくぞくしたよ。でも、普通その直

後にセックスするか？ あいつら、化け物だよ」

喋りながら興奮してきたのか、江角の声が次第に大きくなっていった。

「あの声を聞いたとき、俺にはわかったんだ。社会正義のためとか恰好いいことを言いながら、実は快樂のために殺してるんだと。俺たちは、そんな奴らの手を借りてたんだよ」

江角の顔が赤くなった。それを冷ますように、雨森が口を挟んだ。

「亜麻音さんが殺人に快感を覚える人間だったとしても、それを理由に犯人扱いはできないよ」

「わかってるよ」いかにも心外といった顔で、江角が言い返した。

「俺が言いたいことはふたつだ。ひとつは、吉崎さんとそういう関係だった亜麻音さんなら、吉崎さんはためらいなく部屋に入れるし、目の前でベッドに寝転がるだろうということ」

「確かに」沙月がコメントする。「笛木を殺した後にもやったくらいだから、一橋さんが死んだ後にやってもおかしくない。亜麻音さんが『もう一回戦』とか言いだしたら、吉崎さんは受けるだろうね」

さすが離婚したとはいえ結婚経験者。科白があげすけだ。江角は、今度ははっきりと笑顔を作った。

「もうひとつは、菊野さんだ。亜麻音さんがどうやって菊野さんの部屋に入ったのかは、わからない。でも、思い出してくれ。亜麻音

さんは吉崎さんの部屋で失神した。その後自分の部屋に寝かせたから、亜麻音さんは菊野さんの部屋に入っていないんだ。今から菊野さんの部屋を調べて、亜麻音さんの持ち物があつたら、証拠にならないか？」

「あ……」

千里が口を開けた。ひよつとしたら、絵麻も同じ表情をしていたかもしれない。それくらい、江角の意見には説得力があつた。

雨森が立ち上がった。「確認してみよう」

仲間たちの顔を順に見回す。絵麻はその意図がすぐにわかつた。誰か、一緒に行こうというのだ。行動するときには、常に複数。それが一橋が殺されて以来の、わたしたちのルールだつた。立ち上がる。

「わたしも行くよ」

同じように察したらしい千里も手を挙げた。「わたしも」

三人で食堂を出て、管理人室に向かう。食堂と十分な距離を取つてから、絵麻は雨森に話しかけた。

「どう思う？ 江角さんの話」

雨森は正面を向いたまま答えた。

「正直、あまり期待していない。でも、確認は必要だ」

「髪の毛でも落ちていればいいんだけど」

千里が言った。

「瞳さんは赤いパーマ。沙月さんは黒のロング。わたしは黒のセミロング。絵麻さんは栗色のショート。亜麻音さんは茶色いおかつぱ。区別がつくよ。他の四人は死体発見のときに落ちたのかもしれないけど、亜麻音さんの髪が落ちていたら、立派な証拠になる」

管理入室から合鍵を取ってきたとき、残る三人はもう階段のところにいた。六人で階段を上る。菊野は九号室だ。雨森が合鍵を差し込む。ひねる。解錠される音が響いた。二人の死体を発見したときと同じだ。

あのときは、嫌な予感が腹に重く溜まっていた。ふと思いつき出すことがあった。

「雨森さん」

ドアを開けようとした手が止まる。「何？」

「さつき、こうやって合鍵で入ろうとしたときに『チェーンロックがかかっているといいんだけど』って言ってたでしょ。あれ、どういうこと？」

雨森がきょとんとした顔をした。自分の発言を憶えていなかったらしい。しかし少しだけ宙を睨むと、思い出したようだ。

「ああ。チェーンロックがかかっていたら、ただの寝坊だと思ったからだよ」

一瞬、何を言われたのか、わからなかった。けれどすぐに思考力

が追いついた。「……ああ、そうか」

「そう。チェーンロックをかけるのは、中にいる人間にしかできない。つまり吉崎さん。かかっていたら、吉崎さんは他人の影響を受けずに中にいる。でも、もし誰かが吉崎さんを殺して部屋を出ていったのなら、チェーンロックはかけられない。だからドアが開いた瞬間、吉崎さんはもうダメだと思った」

亜麻音があれだけドアを連打して名前を呼んでも、出てこなかったのだ。あの場にいた全員が、とつくに覚悟していたはずだ。雨森も含めて。それでも雨森は、覚悟という名の思い込みを排除しようとしたのか。そしてチェーンロックが間接的な証拠になり得ることに気づいた。だから、つい口に出してしまった。そういうことなのか。絵麻は今さらながら、雨森の思考力に感嘆した。

雨森がそっとドアを開いた。手を伸ばして照明のスイッチを入れる。

「証拠を探すのなら、そっと入ってくれよ」

ドアを手で押さえて、入室を促す。瞳が真っ先に入った。しかしベッドの菊野を見ずに、奥の丸テーブルに視線を動かしていた。江角も中に入り、すぐに床を観察しはじめた。沙月は一步入っただけで、周囲を見回した。千里はベッドまで歩いて行って、枕元に立った。

絵麻も周囲を見回す。客室の造りは、絵麻が入った部屋と同じだ。ここに来るときに持ってきたポストンバッグは、窓際の丸テーブルに置かれている。バッグのファスナーは閉められたままだ。菊野は着替えてもいないし、開ける場面がなかったのだろう。ということ、明らかに部屋に備え付けられた物以外は、遺留品である可能性が高い。毛髪は言い出しっぺの千里に任せるとして、自分はずっと大きなものを探そう。

「どう？」

ドアのところから雨森が訊いてきた。自分で探す気はないようだ。ということは、先ほどの言葉どおり、証拠が見つかるなんて本当に期待していない。

「それらしいものは、ないね」

沙月が答えた。バスルームのドアを開ける。照明を点けて中の様子を確認する。

「タオルが一枚、使った形跡がある。けど菊野さんがトイレにでも行ったんでしょうね」

バスルームのドアを閉める。「ベッドは、どう？」

「何もない」千里が悔しそうに答える。「髪の毛すら落ちてない」

「ない」屈んでいた江角が身を起こした。全員で部屋を出る。

「仕方ないよ」雨森が慰めるように言った。「なぐさ 亜麻音さんに限らず、

滞在先で人を訪ねるのに、大荷物を持っていく奴はいない。それに、亜麻音さんの遺留品がないことは、亜麻音さんの無実を証明しない」

「それにしても、髪の毛くらい落ちていてもいいのに」

千里は不満げだ。自らの思いつきが空振りに終わったからだろう。雨森が首を振った。

「ベッドのシーツはともかく、床は期待できないよ。ここはフウジンブレードの保養所だぜ。掃除は外部業者に委託してるんだらうけど、徹底的に値下げさせてるはずだ。受けるのは手抜き業者だけだろう。ぞんざいな掃除だと、前に泊まった人の髪の毛が残っていても、不思議はない」

千里が頬を膨らませた。「だったら、探す前に言つてよ」

ごめんごめんと謝りながら階段を下りる。絵麻はちらりと一号室のドアを見た。亜麻音が起きてくる気配は、まだない。

「お昼になっちゃったね」

食堂に戻るなり、沙月がつぶやいた。つられて壁の掛け時計を見ると、針は十二時十五分を指していた。

もうお昼かというより、まだお昼なのかというのが実感だ。朝は、激動の昨日が夢だったかのようにのんびりした。しかしその後の怒濤の展開のおかげで、時間の感覚が狂っている。胃に意識を向け

る。空^{から}っぽなことにはわかったけれど、空腹を感じているわけではない。やはり、異常な状況が食欲を麻痺させているのだ。とはいえ、出されたら食べられるけれど。

「お昼を作るんなら、後片付けはするよ」

ぐったりした江角が言った。女に食事の支度をさせるのか——と怒るほど、こちらも単純ではない。作るより、片付ける方がよほど面倒なのだ。かつて家庭生活を営み、現在は一人暮らししている江角には、それがよくわかっている。おいしく作るのは料理が得意な人に任せて、自分は面倒な片付けを買って出たのだ。江角は確か五十五歳だ。正直に言って、ずっと若い吉崎や雨森の方が、社会人としては優秀な人だと思う。けれどごく自然にことの軽^{けい}重^{じゆう}をわきまえた発言ができるのは、やはり経験を積んだ大人なのだと思う。

「昨夜は。パスタだったよね」

千里が言った。「今朝はトースト。となると、そろそろお米がいいんだろうけど」

「炊く？ 洗ってすぐにスイッチを押したら、そんなに時間はかからないよ。お腹が空^すいてどうしようもないって人がいなければ」

瞳が雨森と江角を見た。この二人は、朝食を摂^とっていない。

雨森は首を振った。「さっきチョコを食べたから、大丈夫」

「作るのは任せるから、贅^{ぜいたく}沢は言わない」

これは江角。

「じゃあ、そうしよつか。おかずは、買ったものから考えるとし
て」

沙月が席を立とうとしたとき、視線が動いた。絵麻の背後を見て
いる。つまり、出入口だ。振り返ると、亜麻音が立っていた。

「亜麻音さん」千里が声をかける。「大丈夫なの？」

「大丈夫です」亜麻音が短く答えた。

亜麻音は自分の脚でしっかりと立っている。ふらついたりしてい
ない。髪も整えられていて、薄く化粧までしてある。保養所で潜伏
しているというより、今から都心にショッピングに行こうとしてい
るかのようだ。

亜麻音が食堂に入ってきた。テーブルの上を見つめる。テーブル
には、まだ先ほど淹れた^いコーヒークップとチョコレート^いの空包装が
置いてあった。

「みなさん、コーヒーを飲まれたんですね」

今からお昼ご飯の準備だよ——そう言いかけたけれど、言葉にな
らなかった。亜麻音が一人ですんずんとキッチンに入っていたか
らだ。しばらく待っていたら、ティーカップを片手に戻ってきた。
昨晚も座った席、沙月の隣に着席する。そういえば昨日は、一杯立
てのドリップコーヒーだけでなく、紅茶のティーバッグも買ったた

な。そんなことを思い出した。

亜麻音は紅茶に口をつけず、背筋を伸ばして席に座っていた。ぐるりとテーブルの周りを見回す。

「誰が、吉崎さんをあんなふうにしたんですか？」

ずばりと訊いてきた。決然とした口調。その声を聴いて、絵麻は

亜麻音がきつちり身仕舞いしてきたことの意味を理解していた。

亜麻音は、戦闘態勢を整えたのだ。

〈つづく〉